

## IV. 2022 年度 玄海風の子保育園事業報告

### 1. 入所児童

年齢別	当初計画	実入所数	増減
乳児	132	99	-33
1・2歳児	456	491	35
3歳児	228	236	8
4・5歳児	535	545	10
合計	1351	1371	20

4月当初は108名でスタートした。0歳児は3名からのスタートで0.1歳児クラスとして当初から4名の担当で組んでいた。前半期は特に0歳児の入所希望が少なく幼児クラスの保育サポートや全体に位置付けながら運営してきた。幼児クラスは転居等も多かったこともあり、3、5歳児の途中入園で園児確保を行ってきた。待機児解消と運営維持のため1.2歳児を可能な限り受け入れてきたが、3月末で122名と定員程度にとどまった。

### 2. 職員の配置

#### (1) 正規職員

職種	期首配置	年度末	増減
園長	1	1	0
主任保育士	1	1	0
保育士	10	8	-2
栄養士	2	1	-1
事務長	0	0	0
合計	14	11	-3

◆8月より産休1名

1月末栄養士1名退職3月末で保育士1名退職

#### (2) 随時職員

##### ① 常勤職員

職種	期首配置	年度末	増減
保育士 (産休代替含む)	4	4	0
調理員	0	0	0
事務	1	1	0
合計	5	5	0

## ②非常勤職員

職種	期首配置	年度末	増減
保育士	8	6	- 2
調理員	3	3	0
その他	4	4	1
合計	15	15	÷ 1

◆10月末で1名退職（週2日程度）入所加算事業での60歳以上の職員で事務・早出・時短フォロー・延長保育のサポートを担ってもらった。（早出・子育て支援のサポートなど）早朝フォロー職員は8月退職したが2月より復職。また9月より1名採用した。

## 3. 保育の重点方針

### (1) 日常運営

社会福祉法人紅葉会の理念や綱領・保育要綱に基づいた保育方針や、職員の就業規則を理解した上で、ひとりひとりの職員が組織の中で自分の役割と責任を認識して仕事をすすめていくことを重視し確かめあってきた。

### (2) 保育内容

#### ◆子どもの人格を尊重する保育の実践

人格を尊重する保育の実践のために毎月の職員会議やクラス会議でも学習を行ってきた。日々の保育の実践の中での迷いや困り感をエピソードを通して集団的に討議し、子どもの捉え方や見方、援助を出しあうことで目の前にいる子ども理解を深めたり、自分とはちがう考えを知ったり自分の保育を振り返る機会となってきた。

**成果** 乳児年間総括より一

（0歳児クラス）職員ひとりひとりの思いや得意なこと、苦手なことを話す中で自己分析にもなり他の人の考えを聞くことで、その人の思いや保育観に触れられた。視点は違っても子どもの保育にあたって保育観や大事な根っこは共有したうえでそれぞれの良さを生かした手立てをとっていこうと考えることができた。子どもの主体と大人の主体を守るためにも発信しあおう。

（1・2歳児クラス）

「一人一人を尊重し大切に保育をめざして一乳児期の育ちを幼児期につなげる」事例を通して乳児クラスにおける幼児期の終わりまでに育ててほしい姿をどのように指導に生かすかを考えあっていた。「育ててほしい姿」は6年間の積み重ねにより育つものであること、乳児期の生活・あそびの中での経験が幼児期にどのようにつながっていくのかという視点をもつことが必要であることを再確認できた。手立てに捉われず「何のために」と問いながら保育を考えることを確認。目先のことでなく先を見通した保育の必要性。同じことをしていても大人の声のかけ方、見守り、タイミングなどにより子どもの経験値、獲得する力がかわってくる。

「子ども理解と大人の手立て」（エピソード学習より）一人一人の子どもたちが安心できる大人の傍で気持ちを表現したり折り合いをつける力を育てること、人と関わる楽しさを感じることができることを目標としてきた。子どもたちの育ちを担任間で共有し見守っていくことを前提に子どもの捉え方と大人の連携についても語りあってきた。大人も一人一人感じ方も捉え方も違って、そのことを理解しあう。その上で保護者支援の在り方も含め率直に話していこう。

#### ◆異年齢保育の実践とコロナ禍の保育から学び風の子がめざしたい保育の確立

1・2歳児は5年目、3・4・5歳児は3年目を終えようとしている。コロナ禍でのリスクを背負いながらも安心できる生活とあそびを最優先にしながら職員みんなで保育を維持してきた。3・4・5歳児の異年齢保育を始めた時から「一人ひとりを尊重し、違いを認めあい、人とゆたかに関わる力を育む」ことを重点におきながら保育のあり方を検討してきた。

運動会は乳児一運動あそびの会（親子で日常のあそびを楽しむ）・幼児は年長に特化した構成ではなく、異年齢クラスを母体とした運動あそび（年長児は3・4・5歳の中でのぼり棒や鉄棒あそびの得意なことを行う）年長リレー→クラスごとの船競争に変更した。ひとりひとりの違いを知り、互いを理解しあいながら重ねてきた仲間とのあそびの中から子どもたちとプログラムを決める形で行なった。

安心を土台とした日々の異年齢での仲間との生活づくりや遊びを通して、特性のある子どもたちも含め、一人ひとりのことを知り、互いを認めあえる関係性が積み重なってきていることで子どもたち一人ひとりの自己肯定感の育ちに大きくつながっている。

その保育の土台づくりとなるこの3年の中で、日々子どもと向き合うときの大人の在り方や価値観の共有をしていくための学びの成果は大きかった。

#### ◆組織的な職員集団づくりとひとりひとりの専門性の向上

子どもを尊重する保育の実践のためには、園の方針のもとで大人同士の信頼関係と連携が大切であることの基本にいつも立ち返り、保育のあり方を振り返ってきた。

組織づくりのあり方で運営として一人ひとりの意見や思いが吸い上げられ保育や給食の運営に反映されているのか、誰もが対等平等に意見が言えているのかを客観的に改めて検証し必要な改善を行っていく課題がある。そのことにより一人ひとりの専門性を高め、チームで協同してやりがいをもって仕事をすすめていく組織づくりに努めていきたい。

#### ◆保護者支援

長期にわたるコロナ禍により、子育てのあり方、子どもたちを取り巻く家族のあり方も多様化し、家庭支援の必要な家庭が増えてきている。それに伴い、個別での面談などをクラス担任と運営で行い、子どもにとってのよりよい日々の生活づくり、必要な家庭支援や療育機関につなげる取りくみを行ってきた。

発達支援が必要な子どもたちも増えることでの厳しさもある中で、支援のあり方も多様化しており、園だけでなく社会資源の情報も取り入れながら行政や連携機関などと連携しての対応が求められた。

#### ◆子どもたちが主体的にあそぶことができる園庭の充実

運動あそびの学習をもとに、一見困った行為に思える子どもの行動から考えられるあそびの保障、環境づくりについても学び合い、環境グループが中心となりながら知恵を出しあい、子どもたちにとって安全で乳児園庭の充実につながったことが成果である。引き続き、長い見通しをもちながら園庭全体の構想を集团的に検討し充実させていくことが課題である。

#### ◆お互いを尊重し、ちがいを認めあえる関係を大切にする統合保育

軽度の発達障害や配慮を必要とする子どもも多くなる中、クラスとともに子ども理解とひとりひとりが安心して過ごせる環境づくりに努めてきた。2022年度は年長児に特に支援が必要な子どもたちが多く、前半期は0歳児クラスの入園児が少なかったことで幼児のクラスサポートに配置するなど工夫してきた。支援加配が十分でない配置基準の中での一人ひとりを大事にした保育に難しさがあったがクラス間の連携に助けられてきた。宗像市の発達支援センターの巡回相談（年2回）は10名ほどが対象児である。

小学校開放日の訪問・運動会への行事参加が実施されなかったが、学校から就学前園訪問（6校区程度）は引き続き実施してもらうことで助けに必要な子どもの申し送りを行ってきた。

#### ◆安全管理とリスクマネジメント

給食におけるアレルギー児の誤食や異物混入などがあった。園として安心できる給食づくりのためにも、業務改善の視点から見直しをはかることが運営として急務の課題である。

##### 非常時災害食

**成果と課題**：毎年保育から2名・給食より1名で担当は変わるが（引き継ぎのため1名残る）記録を残していくことで必要なことは共通確認しながら進めてきた。近年災害が多い中で、火を起こすための道具の準備、水の供給がストップした場合の対応などを重ねてきた。職員自身が身を守る力を獲得し、園内での突然の災害時の子どもたちへの対応に活かす意識づくりに少しずつつながっている。給食室の優先的な食材の使い方（アレルギー児対応）も含め共有すべきことを全体のものにしながら進めていきたい。課題として3日間程度の備蓄食とその場合の非常時献立のあり方の検討がある。

### (3) 地域・他団体との連携

#### ◆子どもをとりまく保育情勢に関する動き

園として保育の情勢や動きはこれまで伝えることを意識してきたが、行事等も少なく、伝える機会が少なくなってしまうお便りや署名への呼びかけなどにとどまった。

子どもの権利保障やゆたかな保育のための保育士の配置基準、処遇の改善、保育料の完全無償化、副食費無償化など今後も伝えていく努力をしながら、国や自治体への働きかけと共同での運動につなげていきたい。

### (4) 通常保育の年間行事

#### ◆主な行事

入園を祝う会・園説明会・乳児保育参加・運動会・乳児・幼児公開保育  
年長行事（春・秋合宿・卒園を祝う会）・地引網・もちつき など

●コロナ禍で自粛してきたこともあるが、行事の捉え方や何のためにするのか、目的を明確にし、行事そのもののあり方を見直す機会にすることができたことは良かった。

**中止にしたもの** 園内交流・園説明会・保育参加・地引網・風の子まつり

**縮小したもの** 入園を祝う会・乳児幼児公開保育（春は縮小で合同実施）  
幼児公開保育（冬は12月⇒1月に延期して実施）

**見直したもの** 年長合宿（夏のデイキャンプを実施）  
運動会（異年齢保育を土台にしたプログラムづくり）  
卒園を祝う会（日常のあそびを大事に2部のみの構成）

異年齢保育もふまえ日常の生活やあそびを大事にした年長活動の在り方を引き続き検討し実践していく

### (5) 特別保育事業実績

#### 1) 延長保育事業

就労支援事業の一環として実施する。

夕方保育として少人数での子どもたちの生活を大切に「縦割りでの保育」を実施する。

	区分	年間延人数	月平均人数
登録利用者数	1時間延長	1616	135

毎日の利用 10～14名程度

#### 2) 一時保育事業

求職中や子育て中のリフレッシュ、里帰り出産などの保育ニーズがあり、地域のさまざまな保育ニーズに応じていく目的で受け入れに努力をはかってきた。前半期は例年より0歳児の人数も少なかったこともあり、可能な限り受け入れてきたが後半期は難しかった。

	区分	年間延人数	月平均人数
利用者数 (日単位)	4時間超	11	0.9
	4時間以内	12	1

### 3) 障害児保育事業

軽度の発達障害の子どもたちも含め、発達支援センターとの連携を行なっていった。

- ・巡回相談でのケース検討
- ・小学校・発達支援センター・園との連携  
(小学校からの園見学)

2022年度は8校の小学校への送り出しを行う。就学相談につながらない子も含め、発達に支援が必要な子どもたちについては特に各小学校からの園見学実施があることで、担任からの申し送りやその子への必要な助けを伝える場になっている。

	区分	年間延人数	月平均人数
利用者数	軽度	72	6
	重度	0	0

### 4) 保育所地域活動事業

- ・世代間交流事業
- ・育児講座 (ぼかぼかくらぶ)
- ・異年齢児交流事業
- ・地域の特性に応じた保育需要への対応

#### (6) 施設および設備の整備

区分	整備の内容	経費
施設整備	さくらんぼ組エアコン	¥616,000
	うめ組エアコン (落雷のため保険対象)	¥660,000
	れもん組エアコン	¥660,000

#### (7) 職員の研修

区分	月	研修会名等	研修内容	参加数
施設内 研修	8月	園内 わらべうた研修	わらべうた実践(乳児・幼児向け) 松田 一乃さん	10
	7月	社会福祉協議会	感染症予防研修 「夏季に流行する感染症予防対策と 新型コロナウイルス感染症について」	4
	7月	保育協会保育士会	●保育園におけるリスクマネジメント	1

8月	労務管理研修	労働関係法・法改正について	1
	保育協会研修	●保育園におけるチーム力・組織力	1
8月	福岡地方保育事業研修大会	「いいんだよは魔法のことば ～寛容な精神が成就される社会へ～」 立花高等学校 斎藤 真人氏	18
11月	わらべうた研修	各クラスでのあそびと実践(月ごと) 松田 一乃さん	2ヶ月に1回
11月	保育協会研修	●保育施設の安全管理 ～保育・教育の価値とリスク～ ●保育の振り返りによる 組織的な保育力向上を ●乳幼児の心が育つ保育 ～doing 保育から being 保育への転換 ●障がい児保育	5
	宗像市研修 (教育委員会主催)	●あそびの中での環境づくりと 大人の援助 ●児童虐待について ●アンガーマネジメント研修 ●歯科保健研修会 ●幼児教育と小学校教育の 円滑な接続に関する研修会 (福岡教育大付属幼稚園) ●熱中症予防研修●特別支援教育	7
9月	九州保育合同研究集会	記念講演「こどもの気持ちはどこにある？」 NPO 法人福祉広場理事長 池添素さん 各分科会 特別講座・入門講座	30
12月	法人研修	●「誰がために憲法はある」映画上映 ●保育から平和を考える	
2月	福岡県子育て保育のつどい	「いま、保育・子育てで大切にしたいこと」 ～子どものために日々奮闘しているあなた と一緒に考えたい～	5

通 年	職員会議	エピソード学習 —子ども理解と大人の援助—	14
通 年	分野別学習	4分野に分かれて（7．8人ずつ）学習	年4回程度 1時間の学習

◆園全体で風の子の保育を再創造していくことを目的に保育計画検討委員会を立ち上げた。どんな子どもたちに育ててほしいのか、保育で何を育てるのかという願いに立ち戻りこれまでの自分たちの保育を振り返る機会となった。全体的な計画の各年齢の育てたい力の見直しをしていく段階にあり、2023年度も引き続き実施し、今後の風の子の新たな保育の創造につなげていきたい。

◆自己研修として専門分野での研修実施をしてきた。3年目の学びの中で2022年度は4つの分野に分かれ、分野ごとに主体的に学びあい、保育の実践につなげやってみること～振り返りまでを目標に行ってきた。

- ①健康（乳児期の身体の育ちの理論学習と実践における疑問から学びを深める～大人の助けについての学習）
- ②環境（あそび環境づくりの学習～乳児園庭の環境づくり～）
- ③ことば（身体の育ちと口腔機能の学習～あそびにつなげる実践・ことばの言い換え等）
- ④表現（心を動かす体験の大事さと子どもの自由な表現づくりのための大人の役割  
平和のつどいにおける「ぞうれっしやがやってきた」音楽劇実践）